

文部科学省

2010年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究

調査研究報告書 I

不登校・ひきこもりの子ども・若者へのピアサポーターによる
「アウトリーチ型」支援の有効性と家庭支援のあり方に関する調査研究

2011年3月

特定非営利活動法人ピアサポートネットしぶや
調査研究委員会

目 次

I.	調査研究の概要	1
II.	調査研究結果の要旨	2
III.	「アウトリーチ型」支援の一般的課題と渋谷における ピアサポート型アウトリーチの5つの利点	3
IV.	不登校・ひきこもりの子ども・若者支援における ピアサポーターによる家庭支援の課題と4つの有効性	7
V.	今後に向けた課題提起と提案	10
VI.	近年の福祉、教育分野における 「アウトリーチ型」支援の取り組みや施策	11
VII.	ピアサポーターへの1次調査票	13

1. 調査研究の概要

1. 調査研究の目的

人と会うこと、付き合うことが苦手な不登校・ひきこもりの子ども・若者にたいしてピアサポーター（主として大学生世代を中心とするボランティア）が訪問し1対1の関係をつくることにより、グループワーク・社会参加活動、家庭教育支援へつなぐピアサポート活動の有効性を検証する。

2. 福祉、教育分野の「アウトリーチ型」支援の情報収集と比較検討

近年の精神保健、育児、若者、家庭教育支援における「アウトリーチ型」支援の取り組みや施策について情報を集め、5つの事例に着目して比較を行うことにより、渋谷における「アウトリーチ型」支援の特色、利点を分析した。

3. ピアサポーターへの1次調査

不登校・ひきこもりの子ども・若者へのピアサポーターによる「アウトリーチ型」支援の8つのケースについて、特に親の状況、ピアサポーターと親との関わりの内容を回答用紙に記入してもらい、支援の有効性と課題についての分析を行った。

ケース1) 男、小4～6年、不登校、母子家庭。

ケース2) 男、16歳、不登校、祖母と母との3人暮らし。

ケース3) 女、13歳、不登校、母子家庭、アスペルガー症候群。

ケース4) 男、22歳、家庭内暴力、両親と同居。

ケース5) 男、17歳、不登校、母と弟と同居、アスペルガー症候群。

ケース6) 男、17歳、ひきこもり、祖母と両親と同居。

ケース7) 男、14歳、不登校、小3時に父の自殺現場目撃、母子家庭。

ケース8) 男、15歳、不登校、両親が自殺、祖父が保護者。

4. ピアサポーターへのヒアリング

1次調査の分析結果をもとに仮説を立てた「アウトリーチ型」支援の有効性と課題のポイントについて、さらに詳しい情報を確認するために、ピアサポーター8名にヒアリングを行った。

II. 調査研究結果の要旨

1. ピアサポーターによる「アウトリーチ型」支援の5つの利点

近年の精神保健、育児、若者、家庭教育支援における「アウトリーチ型」支援の取り組みや施策について情報を集め、5つの事例に着目して比較したところ、渋谷におけるピアサポーターによる「アウトリーチ型」支援の5つの利点が浮き彫りになった。

- 要支援者との接点をつくりやすい「ネットワーク型支援」
- 要支援者に寄り添える「ピアサポート型支援」
- 要支援者の社会的自立環境を整える「社会関係付加型支援」
- 要支援者の問題を深刻化させない「予防型支援」
- 要支援者から支援者になる「人材連鎖型支援」

2. ピアサポート型アウトリーチによる家庭支援の4つの有効性

不登校・ひきこもりの子ども・若者へのピアサポーターによる「アウトリーチ型」支援の8つのケースについて、特に親の状況、ピアサポーターと親との関わりの内容を分析し、さらに詳しい情報を確認するために、ピアサポーター8名にヒアリングを行った結果、ピアサポート型アウトリーチによる家庭支援の4つの有効性が確認された。

- 親・家族に寄り添える「多世代型ピアサポート」
- 状況を前向きに考えられるようにかかわる「客観化型支援」
- 家族一人ひとりと別々に向き合う「家族個別型支援」
- 子ども・若者、保護者の「代弁者型支援」

III. 「アウトリーチ型」支援の一般的課題と 渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの5つの利点

1. 要支援者との接点をつくりやすい「ネットワーク型支援」

【一般的課題】

多くの「アウトリーチ型」支援では、要支援者との最初の接点が窓口待機型でつくられるため、最も「アウトリーチ型」支援を必要とする困難なケースでありながら自らは支援を受けに来ない要支援者につながりにくいという根本的な課題がある。

【渋谷における利点】

渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの取り組みでは、渋谷区教育センターおよび区の委託事業である SHIBUYA わかもの支援相談室が、子ども・若者、その保護者の相談を受ける窓口となっている。しかし、不登校・ひきこもりの子ども・若者支援が始まる母体となった渋谷区内 11 地区で行われている子どもたちの居場所事業をはじめとして、地域の青少年育成組織、法務局（子どもの人権相談ホットライン）、区立小中学校などを通じて支援を必要とする子ども・若者や家庭の情報が伝わる場合もある。

ピアサポート活動が単独で行われるのではなく、様々な地域に根ざした取り組みやそこにかかわる組織や人による多角的なネットワークにつながって行われていることにより、自らは相談に来ないようなケースであってもアウトリーチを行う接点をつくるのが可能になっているのだ。

2. 要支援者に寄り添える「ピアサポート型支援」

【一般的課題】

様々な支援を必要とする要支援者の中には、専門家によって行われる「アウトリーチ型」支援を拒絶することも良くある。待機型の窓口における専門家による指導的な支援に拒否感を持っていたり、専門家との間でトラブルが生じた経験があったりする要支援者は、「アウトリーチ型」支援で訪問する支援者が専門家である場合、訪問を歓迎しないことがある。

【渋谷における利点】

渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの取り組みには、ピアサポーターが専門家ではなくボランティアだという特色がある。それによりピアサポ

ーターは支援を必要とする子ども・若者や保護者にとって指導的な存在ではなく対等な相手として受け入れてもらえるというアドバンテージが生じる。

要支援者の生活圏の中で支援を行う「アウトリーチ型」支援では、まず相手が自分たちの生活圏に支援者を受け入れてくれなければ成り立たない。ピアサポーターの非専門性は、この敷居を低くする上でとても重要な要素といえる。

3. 要支援者の社会的自立環境を整える「社会関係付加型支援」

【一般的課題】

多くの「アウトリーチ型」支援では、病気、失業、不登校など個別問題を解決することに焦点を絞りがちな傾向があるが、それでは「要支援者の孤立」という根本の問題が解決されず、社会の中で助け合いながら自己実現を当事者なりに続けられるような社会的自立環境を周囲につくることが出来ないため、再び元の困難な状況に戻ってしまうことも多い。

【渋谷における利点】

渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの取り組みでは、子ども・若者にピアサポーターがかかわる場合、最初から無理に外出を勧めたり、人の輪に入って活動したりすることを促したりはしない。しかし、相手との信頼関係が生まれるに従って、本人の好みや関心に合わせて家以外の場に連れ出したり、同世代と接点を持てるような機会を提供したりして、社会との関係づくりを少しずつ進めていく。

この際に重要なのが居場所の存在である。渋谷の取り組みではもともと区内 11 カ所で子どもたちの居場所づくりを行ってきた。さらに、若者にたいしてもピアサポートネットしぶやの事務所を拠点として学習支援やフリースペース活動が行われ、若者の居場所を提供している。ピアサポーターの関わりによって不登校やひきこもりから抜け出しつつある子どもや若者たちは、こうした居場所において同世代はもとより異世代との人間関係を新たにつくっていく。本人を取り巻く社会関係が豊かになることによって、社会の中で生きていく自信が高まり、何かに躓いた場合にも手を差し伸べてくれる誰かがいつも周りにいてくれるという安心感が生まれる。

渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの取り組みでは、子どもや若者に社会関係を付加することによって、社会的自立の環境を整えている。

4. 要支援者の問題を深刻化させない「予防型支援」

【一般的課題】

「アウトリーチ型」支援は、自分からは支援を受けに来ない、または来ることが困難な要支援者にたいして、要支援者がいるところまで出向いて行う出張訪問型支援である。しかし、要支援者が抱える問題が深刻になればなるほど、出張訪問先で行う支援も困難になる。そこで、問題が深刻化する前の段階から対象者を把握して関わりはじめる予防的なアウトリーチが必要といえる。しかし、まだ顕在化していない問題を把握して予防的支援を行うには、対象を特定してピンポイントで対応する「アウトリーチ型」支援とは違い、地域に広く網をかけるような取り組みをしなければならず、単独または数人のチームで行われる通常の「アウトリーチ型」支援の取り組みでそれを行うことは困難である。

【渋谷における利点】

繰り返しになるが、渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの取り組みは、子どもや若者のための居場所活動などを基盤とした多元的なネットワークをもっている。このネットワークは、予防的支援を行う上でも役割を果たす。地域に根ざした居場所活動を支える人々は、それぞれが地域の中に様々な人間関係の広がりを持っている。その中には、民生児童委員、保護司などいれば、町会長や地区の学校の校長などとのつながりもある。

家庭が抱える問題がまだ深刻化していない段階でも、例えば育児放棄の兆候がゴミ出しの問題に現れる場合もあるし、家庭内で問題を起こす兄がいて弟が家に帰りがたらず非行グループに関わりはじめる場合もあるかもしれない。こうしたことにネットワークの誰かが気づけば、ネットワークでつながっている様々な立場の人々が連携して対応することができる。

渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの取り組みは、その周りに多元的なネットワークがあることによって地域に予防型支援の網をかけることができる利点がある。

5. 要支援者から支援者になる「人材連鎖型支援」

【一般的課題】

介護保険サービスを除き、社会的セーフティネットとしての既存の制度的支援ではカバーされない問題に対応することがおおい「アウトリーチ型」支援では、担い手となる人材も制度的に育成されるわけではない。そのため、

多くの場合は、限られた担い手が活動を続けざるを得ず、場合によっては燃え尽きてしまうメンバーが出て、替わりになる新たなメンバーがいないということも起こる。

【渋谷における利点】

渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの取り組みでは、子どもや若者のための居場所活動が行われている。ピアサポーターがかかわる子どもや若者の中には、不登校やひきこもりから抜け出すきっかけをつくるために居場所を利用することにとどまらず、居場所の活動の担い手となるものもいる。

自らが学習支援を受けながら新たに居場所を利用するようになった若者たちのリーダー役を務めるようになったり、仕事をするようになった後もピアサポーターとしてアウトリーチ型支援の取り組みに参加したりするようになった若者がいる。彼らは単に同世代というだけでなく、当事者同士というピアな関係による共感を土台とした支援ができるという利点を持っている。さらに、誰かの役に立てるという経験は、彼ら自身が世の中で生きていくための自信と生き甲斐を得る上で非常に大きな意味がある。

渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの取り組みには、要支援者から支援者になる、またはその垣根をなくし相互に支え合う人材連鎖型支援の仕組みがつくられている。

IV. 不登校・ひきこもりの子ども・若者支援におけるピアサポーターによる家庭支援の課題と4つの有効性

1. 親・家族に寄り添える「多世代型ピアサポート」

不登校やひきこもりの子どもや若者たちにかかわる際、彼らの保護者も大きなストレスや不安を抱えていて支援を必要としていることが多々ある。そのような場合、保護者にたいする支援を子どもや若者にたいする支援と並行して行うことが求められる。

しかし、支援する若者と同年代のピアサポーターの場合、世代が異なる保護者が悩みや不安を打ち明ける存在にはなりにくいことが多い。打ち明けられたとしても、人生の経験が足りないために受け止めきれないということも生じる。

その点、渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの取り組みでは、大学生世代を中心としたピアサポーターと連携して、保護者と同等またはそれ以上の人生経験を積んでいる大人のサポーターが保護者の相談を受け助言を行う体制が整えられている。子どもや若者にたいするピアサポーターと保護者にたいするピアサポーターによる「多世代型ピアサポート」が行われているのだ。

例えば、子どもの問題についての考え方が両親で食い違っていて、子どもの前でけんかが絶えず子どもが混乱してしまっているようなケースがあった。そのような場合、大人のサポーターが積極的に親にかかわり、「子どもの前では考え方が一致している両親の姿を見せる必要がある。でなければ子どもは大人社会を拒否してしまう」という助言を行ったことにより親の姿勢の変化が見られたという。

2. 状況を前向きに考えられるようにかかわる「客観化型支援」

保護者が自分の価値観や希望と現実の子どもの状況のギャップを素直に受け入れることが出来ず、自分も苦しむし、子どもの側もそれがストレスになる場合が多い。

例えば、同級生が遊びに誘ってくれたり、先生が会いに来てくれたりしても、素っ気ない態度を続ける不登校の子どものことが理解できず悩んでいる正義感が強い母親のケースがあった。母親にピアサポーターから見たその子の優しさや感受性の豊かさなど良い面を伝え続けたことで、母親が子どもを信じて過干渉を控えるようになり、子どもが部屋で落ち着けるようになった。その結果、

子どもの様子も少しずつ改善していったという。

保護者は目の前の子どもや若者の状況に一喜一憂しがちだが、その様子が子どもや若者にさらなるストレスを与えてしまう。そうした悪循環を起ささないためには、保護者が子どもや若者にたいして少し距離をとって客観的に見守れるようになる必要がある。ピアサポーターが子どもや若者のありのままを受け止めて認めている姿に接することにより、保護者が安心して状況を受け入れて前向きな思考ができるようになる。ピアサポーターによる家庭支援には、このような保護者の子どもや若者にたいする見方を客観化する効果がある。

3. 家族一人ひとりと別々に向き合う「家族個別型支援」

長年にわたり不登校やひきこもりを続けている子どもや若者の家庭では、家族間のトラブルに繰り返しによって家庭内の人間関係が複雑にもつれてしまっている場合がある。ピアサポーターがこのような問題を解決することは非常に困難である。

たとえば、子どもを責めるばかりで向き合おうとしない父親、子どもを甘やかしがちな母親、そしてそんな両親に暴力をふるい精神安定剤の過剰摂取をしている若者の家庭にピアサポーターがかかわっているケースがある。ピアサポーターから見ると、3者の中にそれぞれ誤解があると感じられるが、それらの誤解を整理して解消することは目指していないという。

このような場合に、ピアサポーターが間に入って関係修復を試みるならば、家庭の中の人間関係のもつれに巻き込まれることになりかねない。そうではなく、それぞれからの求めに応じて個別的に相手と向き合い、1人ひとりの気持ちを受け止め支援することにより、家庭内の混乱した状況を少しずつ落ち着かせる関わりをピアサポーターは行っている。

4. 子ども・若者、保護者の「代弁者型支援」

自分のいいたいことがうまく言葉にして伝えられない、さらにはそもそも自分でも自分の心の中のことが分からないというようなことが繰り返されて、周囲とよい関係がつかれず不登校やひきこもりが長期化している子ども・若者も多い。また、子どもや若者の問題を保護者の育て方の問題と決めつけてしまいがちな学校や相談機関と信頼関係が築けない保護者もたくさんいる。

たとえば、同級生や先生にたいしては過度に緊張してしまうため学校には行きたくない小学生に寄り添い、自宅から遠い街に連れ出して買い物などで人と

接する機会を増やしていき2年かけて同級生と遊べるようにして学校にも行けるようになったケースがある。この場合ピアサポーターは、子どもがゲームや漫画で一日を過ごしているのは時間を過ごすためであり、本当は外出もしたい小学生の声にならない気持ちを周囲に向けて表現する代弁者の役割を果たしたといえる。

このケースでは、離婚後1人で子どもを育てるために朝から夜まで働いている母親について学校は、子育てを放棄していると決めてかかっていた。しかし、訪問すると掃除は行き届いていて子どもの洋服もきちんと整理されていた。ピアサポーターは、こうした様子を学校に伝え、学校の母親にたいする見方を変える役割も果たした。母親の子どもへの愛情を周囲に知らせる代弁者の役割を果たしてもいる。

V. 今後に向けた課題提起と提案

1. 対象となる若者の高年齢化に対応する人材の確保

内閣府の「若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）報告書」（2010年）によれば、15歳から39歳までのひきこもりの若者の内30代の割合は約46%である。この数字は、同調査報告書の計算値を参考にすると30代のひきこもり状態の人々が全国に約30万人以上存在すると示していることになる。また、ひきこもりが始まった年齢でも、20代以降と回答した人の割合は、ひきこもり状態にある人たちの63.6%に達している。

渋谷におけるピアサポート型アウトリーチの取り組みにおいても、対象となる若者の高年齢化への対応が求められる。そのためには、2つの対策が必要になるだろう。

1つ目は、高年齢化した若者に対応する同世代（20代後半から40代）のピアサポーターを確保するという対策である。今でもこの年代のピアサポーターが活動しているが、対象となる若者が増えればそれだけ多様な個性や状況に対応しなければならないので、様々なタイプのピアサポーターが必要になる。しかし、ボランティアとしてこの世代が活動できる時間は限られる。チームでの対応やメールを通じたコミュニケーションなど活動方法を工夫がもとめられる。さらに、居場所活動などを通じて自然に集まってきた大学生世代のピアサポーターとはちがい、彼らが働く企業と連携した体験プログラムの実施など、この世代とのつながりをつくるための新たな機会の開発も考慮するべきである。

2. キャリア開発のサポートができる体制の整備

対象となる若者が高年齢化することへの2つ目の対策は、世の中で働きながら生きていくためのサポート体制の整備である。対象となる若者の年齢が高くなるということは、親が高齢化するということを意味していて、それだけ経済的に逼迫していくということだ。したがって、ピアサポート活動においても就労のためのより積極的なサポートが求められる。

この場合、単に若者に働く意欲を持たせる関わりだけでなく、働く場の確保や働くために必要な訓練の場を探すなどが必要で、ピアサポーター1人ひとりの対応では限界がある。企業の協力や職業訓練期間との連携の仕組みをつくるなど、組織的な対策が行われるべきである。

VI. 近年の福祉、教育分野における 「アウトリーチ型」支援の取り組みや施策

近年の精神保健、育児、若者、家庭教育支援における「アウトリーチ型」支援の取り組みや施策について情報を集め、5つの事例に着目して比較を行うことにより、渋谷における「アウトリーチ型」支援の特色、利点を分析した。

1. アウトリーチ型地域ケアマネジメントと訪問型生活訓練研修

独立行政法人国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所による、精神障害者・知的障害者の安定した地域生活の支援、退院促進を目指したアウトリーチによる地域ケアマネジメント、ならびにこれを含む障害者自立支援法上の訪問型生活訓練の実践を普及させるため、必要な技術や課題の修得を目的とする。研修対象は、市町村の精神保健福祉士、医師などの精神保健関係者。

(参考文献)

- 第3回 アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修、
http://www.ncnp.go.jp/nimh/kenshu/h23/h23_out03.html
- 特定非営利活動法人 ほっとハート、「障害者保健福祉推進事業 平成21年度報告書」、2010年

2. 乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）

市町村に次世代育成支援対策交付金を支給して実施する厚生労働省による、生後4か月までの乳児のいるすべての家庭を訪問し、様々な不安や悩みを聞き、子育て支援に関する情報提供等を行うとともに、親子の心身の状況や養育環境等の把握や助言を行い、支援が必要な家庭に対しては適切なサービス提供につなげる。このようにして、乳児のいる家庭と地域社会をつなぐ最初の機会とすることにより、乳児家庭の孤立化を防ぎ、乳児の健全な育成環境の確保を図る施策。

(参考文献)

- 厚生労働省、「乳児家庭全戸訪問事業ガイドライン」、
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate12/03.html>
- 厚生労働省、「第3回「生後4ヶ月までの全戸訪問事業・育児支援家庭訪問事業ガイドライン」策定に関する有識者・実務者会議資料（平成20年10月10日開催）」

3. 養育支援訪問事業

市町村に次世代育成支援対策交付金を支給して実施する厚生労働省による、育児ストレス、産後うつ病、育児ノイローゼ等の問題によって、子育てに対して不安や孤立感等を抱える家庭や、様々な原因で養育支援が必要となっている家庭に対して、子育て経験者等による育児・家事の援助又は保健師等による具体的な養育に関する指導助言等を訪問により実施することにより、個々の家庭の抱える養育上の諸問題の解決、軽減を図る施策。

- 厚生労働省、「養育支援訪問事業ガイドライン」

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate08/03.html>

- 厚生労働省、「第3回「生後4ヶ月までの全戸訪問事業・育児支援家庭訪問事業ガイドライン」策定に関する有識者・実務者会議資料（平成20年10月10日開催）」

4. ユースアドバイザー養成プログラム

「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会」（平成16年9月～平成17年6月）の報告、「子ども・若者育成支援推進法」の成立を受け内閣府が平成20年3月に作成した若者の自立支援に対応する施策。イギリスのコネクションズなど海外の若者自立支援の事例などを参考に、家庭支援、アウトリーチを強く打ち出した。

- 内閣府、「ユースアドバイザー（仮称）の研修・養成プログラムの開発に向けた調査研究報告書、2008年
- 内閣府、「ユースアドバイザー養成プログラム（改訂版）」、2008年

5. 訪問型家庭教育相談体制充実事業

地方公共団体向け委託事業として実施された文部科学省による、子育てに関する学習機会の提供など家庭の教育力の向上に向けた総合的な取り組みの推進施策。子育て経験者、民生委員・児童委員や保健師などの専門家が連携し、チームを構成し支援するなど、身近な地域においてきめ細かな家庭教育支援が実施されるよう促す。

- 文部科学省、「平成21年度訪問型家庭教育支援チームの取り組み事例集」、2010年

VII. ピアサポーターへの1次調査票

不登校・ひきこもりの子ども・若者へのピアサポーターによる「アウトリーチ型」支援の8つのケースについて、特に親の状況、ピアサポーターと親との関わりの内容を回答用紙に記入してもらい、支援の有効性と課題についての分析を行った。

【ケース1】

対象者：男、小4～6年

ケース内容の概略：母子家庭のAさん（小学高学年）は、学校や先生、同級生の存在を極度に気にして自宅で過ごすことがほとんどだった。保護者は、朝から働いているために忙しいのか、お昼過ぎに訪問すると必ず、カップラーメンが置いてあった。Aさんは、ゲームや漫画を一日中読んで過ごしているが、ゲームや漫画が好きなわけではなく、一人で時間を過ごす手段だと感じる。そこで、出来るだけ学校や先生、同級生の存在を気にしなくてすむ場所で第三者との会話をする機会を持ちたいと考え、バスや電車で少し離れたS区などを中心に活動した。はじめは、通行人などにストレスを感じていたようだが、2年後には店の店員に質問出来るくらいになった。その後、次第に同級生の会話が増えだし、一緒に遊べたことをきっかけに学校へ戻った。

親の状況の概略：A君の母親は、離婚してからずっと朝から夜の10時位まで仕事をしていて、休みも家族で過ごすことは少なかった。A君が学校へ行かないことが影響しているのか保護者が他の保護者と接したり、会話をしたような話は一度も聞いたことがなく、学校も仕事ばかりで子育てしていないという評価だった。保護者と会って話すととても大人しい感じで、A君の自宅へ訪問するときれいに掃除がしてあり、A君の洋服がたたんであったり、子育てをしていないのではなく、A君の朝が遅いなどの生活リズムにAの母親の仕事のリズムが合わないだけだと感じた。しかし、自分自身もAの母親とのコミュニケーションをとるためにどうしたらよいかという気持ちはあった。

ピアサポーターによる親にたいする関わり概略：携帯の番号は知っていたが、電話は全くつながらないため、訪問の時に手紙と自分のアドレスをメモしてポストに入れておいた。翌週にはA君を通じて1冊のノートを受け取った。中には、A君の母親より、ノートを使ってお互いに連絡やA君の様子を伝え合いたいとのことだった。それから、A君の母親は、自宅でのAの様子や変化、自分は、活動の様子、A君の活動中の交通費や食事など費用の確認などノートを通じて行った。このことで活動範囲も広げることができたとし、そのことがA君を中心にした家庭内の会話が増えることにもつながったようである。実際の保護者は、学校の評価とは、だいぶ違ったと学んだ事例だった。

【ケース 2】

対象者： 男、16 歳 B

ケース内容の概略：中学生の時より、不登校だった B は、祖母と母親との 3 人暮らしだった。中学時代よりずっと外に出なかったためか、B は色白で痩せていてそれをとても気にしていた。B は、高校に入学し（中 3 年で高校受験に失敗）サッカー部に入りたいと希望していたため、活動は B の自宅周辺の散歩が中心で毎回 1 時間程度散歩していた。B との活動後は、保護者（B の母親）の話（B の受験のことと B の家庭の話）を聞くことが多かったため、毎回の活動の時間が長くなる傾向があった。

しかし、突然、B の保護者より、訪問を今後はしないでほしいという連絡が入る。詳しい理由は教えてもらえなかったが、「B が合わないからやめたい」と言っているそうだった。

親の状況の概略：B が中学生の時に離婚する。その後、実家に戻り 3 人で暮らす。仕事はしてなくその分、B のことを気にかける。夏に散歩に行くと言えば、水分補給やタオルなどを何度も確認し、散歩のルートも事前に B は保護者に伝え、冬も同様に服装や飲み物のことまで B に指示していた。B の祖母は、高齢で体が弱い様子だったが、家事などは祖母が担当しているようだった。

帰る前の保護者の話は、B の進学先に対する不安（不良はいないか、サッカー部は厳しくないかなど）と祖母との関係について（不満）、B の性格や気質、実家に戻った悔しさなどがほとんどだった。

ピアサポーターによる親にたいする関わりの概略：訪問当初より、メールや電話は苦手のため、訪問の帰りに少し話をする時間がほしいとのことだった。時間は 30 分～1 時間で、B 君と別れた後で、保護者が外に出てきて話すので B 君は何を話しているか気にしていませんかと何度か訪ねたことがある。

訪問中止になった正確な理由は分からないが、いつも保護者が中心の B 君の様子だったりして話を聞くことが辛く感じだしていたこと、B の訪問後にも予定が入ることが多く、話を途中で終わらせてもらうことが多くなったからではないか。と感じる。

時間がたって冷静に考えてみると「保護者」が一番話を聞いてもらったり、もらえるピアサポーター的な存在が必要だったのではと感じる。

【ケース 3】

対象者：女、13歳 C

ケース内容の概略：アスペルガーを有した C さんは、友人関係がうまくいかず、ひきこもっていた。C の学力は高いが、新しいものへ興味はなく、人とのふれあいを嫌い自宅でテレビを見て過ごしていることが多かった。彼女の特性のために、外出は特に難しかった。保護者より C の情報を聞き、C の好きな猫を見に行ったり、DVD を借りに行ったり、C が外出できそうな場所を探し、外出を繰り返した。

また、ピアサポーターは、C の人や動物に対する接し方が分からない点（人を本気で叩いたり蹴ったり、ペットは投げ捨てる、踏みつけるなどの行動）が気になり、活動中に手が出ると大げさに痛がったり、第三者がどう感じるかを伝えることを考えて接した。C は、次第に友達と遊べるようになり、現在は学校に通えている。

親の状況の概略：父親の DV で離婚。母親は、フルタイムの仕事（残業なし）。母親は、学力が高い C が学校に行けないことを受け入れることがないこと、日中 C を一人で残すことが不満の様子だったが、C の成長に従って、C の起床が遅く、出勤時間が遅れそうになる、（自分は疲れているのに）寝ないなど C に対する不満と家では普通に過ごす C が登校できないのは学校や行政側の対応が悪いのではないかという不満になる。

そのため、C が気に入った支援、保護者の事情にあった支援を探し回り、複数の機関とつながるが、長続きせず、継続した支援が難しかった。

ピアサポーターによる親にたいする関わりの概略：C の信頼＝保護者の信頼を得ることだと考え、C との時間を楽しい時間にするように C が苦手なことはやらず、得意・好きなことを中心に活動した。

次第に保護者も安心感を得てくれるが、今度は、様々な要求がふえることになった。そこで、保護者の要求を丁寧に聞くこと、出来ることは協力し出来ない場合は、出来る範囲の提案をすることにした。保護者の希望を聞き、C の特性に合わせた活動を行ったため、保護者は、学校や行政の共通の支援と違い自分の家庭を考えてくれていると感じたようだ。

その保護者との関係が出来たことで、C に対する継続した支援が可能になり、保護者から相談が来て、関係機関とつなぐ保護者の相談窓口になることができた。

【ケース 4】

対象者：男、15歳 T

ケース内容の概略：T は、眠ることが出来ずに深夜を出歩いていることが多かった。そのうち、遊んでいた先輩に会う。それから次第に外泊が多くなり、ついに家のお金を持って家出したこともあった。

学校へは朝起きられないため登校せず、自宅では、保護者が厳しく指導するが朝方に帰って寝ることがほとんどだった。

本人は、高校からの再出発を目指し、進学を希望するが、遊び歩いて登校しない T に対して協力はなく、保護者は、進学の情報がないことで不安を強めた。

一方で、保護者も T の帰りが気になり、眠れないことに加え、様々な各相談機関に呼ばれることに疲れていた。

親の状況の概略：会社の社長の祖父が現在の保護者。その祖父の三男である T の父親の DV が原因で T の母親が自殺。その 2 年後に T の父親も自殺した。

現在は、祖父、姉、T、お手伝いの 4 人暮らし。

保護者は、とても真面目で、学校の先生の指示通り T に対応したが、うまくいかないうえにそのことを強く T に責められ（俺より学校の言うことばかり正しいのか）最近 T に理解を示す。

お手伝いさんが、T の行動や態度に対して強いストレスを感じている。

ピアサポーターによる親にたいする関わりの概略：保護者は、仕事がとても忙しくなかなか連絡が取れないため、仕事が終わり、自宅へ戻っているような時間に訪問したり、連絡をとるようにした。

【ケース 5】

対象者：男、22 歳 D

ケース内容の概略：D は、大学在籍中であるが、人の視線や話し声が気になり大学に通えず、ひきこもっていた。また、父親との関係が小学校よりうまくいかないため、大学入学当初より、自宅近くに一人暮らしをしていた。買い物にも行けないため、食事や洗濯は母親が通ってやっていた。

その後、実家へ戻るが、家庭内暴力や金銭の要求などで親子間の問題、安定剤の過剰摂取などの問題を抱えることになる。

事例が重いため、緊急対応として、保護者担当、D 担当、医療担当（医者）、スーパーバイザーのチームで対応できる体制をつくった。

親の状況の概略：父親は D 区役所に努め、地域の青少年委員、地区委員などを務める。ずっと教員（祖父は校長）のため、教育には厳しい（保護者本人の言葉）。学校生活や進学など順調にいかない D に対して「お前が悪い、周りを困らせて楽しいか」など発言し、D と向き合おうとしない。母親は E 区役所勤務。一人暮らしの費用は全て母親が出していた。そのため、一人暮らしの時は、D との関係は良好であったが、実家に戻ったのちは、母親の心配や声掛けが逆に D のストレスにつながり、父親同様に暴力や金銭要求に対象になっている。

ピアサポーターによる親にたいする関わりの概略：（チーム対応）この家庭は、夫婦間、親子間でのコミュニケーションがないため、家族の一人ひとりをそれぞれ対応することにした。父親への対応は、自分の教育方針についての話、D に対するかかわりかたをメールや電話を中心に話を聞き、アドバイスした。母親は、D のことでヒステリーを起したときに電話で話を聞いたり、家族（D と D の父親）の相談を受けたりした。D 本人は、保護者に対する想いと自分自身の辛い気持ちを受け止め、外出サポートを行った。

一つの出来事があるとそれぞれから連絡が来て、それぞれ 3 者の視点で話すので、家族間で認識の違いや誤解もあることがよくわかった。しかし、それらの誤解を整理して解決を目指すのではなく、この家庭の一人ひとりを支えること、受け止めることなどを現在行っている。

【ケース 6】

対象名：男、14 歳 K

ケース内容の概略：K は、小学校 5 年時に登校しぶりや不登校をしていたが、6 年時は欠席もなく登校していた。中学でも欠席はなく、厳しくて知られるバドミントンクラブに入り、練習もほとんど休まず出席していた。しかし、2 年生の夏休み後に突然部屋から出なくなり、学校を休む日が続いた。1 ヶ月が過ぎたあたりからかかわる。毎回、5 分くらい話をして、その後保護者から最近の様子を聞くという活動を半年くらい続けた。その間も、K は、友達が家に来て会えず、部屋で過ごしていた。半年後、彼が好きな雑誌をプレゼントしたり、DVD を見たりしているうちに服を見に行ったり、外出が出来るようになった。中学校の職場体験に参加したことをきっかけに学校に戻る事が出来た。

親の状況の概略：父親は K が小 3 の時に自殺。母親は、外で働く。K が、父親の現場を見てしまったこと、自分ひとりでなんとか育てたいという気持ちが強く、母親は K に対してとても気を使っていた。

そのため、K の帰りが遅くなった、お金をどこに使っているか分からないなど K の行動や変化に毎回、不安になったり、心配していた。

ピアサポーターによる親にたいする関わりの概略：とてもまじめで心配ばかりの母親だったので、K の本来持っている優しさや繊細な性格について伝えることが多かった。いろいろ心配になるかもしれないけど、本来の K を信じて任せましょうとよく話した。また、同級生が遊びに来てくれたのにとか、先生がわざわざ会いに来てくれたのに K が会わなかったり、そっけない態度をとることに「うちの子はどうしてあんな態度をとるのか」とよく悩んでいた。今は一人で過ごしたい時期だから、安心して一人で過ごさせませんかともよく話した。母親の不安を受け止めてと出来るだけ K との距離が近づかないよう、K が安心して部屋で過ごせるように努めた。

【ケース 7】

対象者：男、17 歳 F

ケース内容の概略：小学校より、不登校だった F は、いつも母親と一緒にないと不安で固まる傾向の子だった。しかし、17 歳になる頃に母親が F の気持ちを察したり、話に入ってくると F はイライラするようになった。そこで、F との活動を出来るだけ仲間と過ごせる時間にしたいと感じ、事務所で活動することにする。

親の状況の概略：家庭的には、裕福で母親は子育てに専念できる環境、小学校時より、不登校という理由からか F に対してとても多くのお金と時間を使っていると初対面（F が小学校 5 年）の時に感じていた。しかし、F の弟も不登校になったことで保護者は、学校や教育センター、医療関係に通うことが増え、ストレスに感じていた。そのため、学校や教育センターの指導に対してとても神経質になったいた。

ピアサポーターによる親にたいする関わりの概略：F は、アスペルガー障害のため、コミュニケーションが苦手だったが、自分で話したい、気持ちを伝えたいと感じているのだろうと感じて、F が話すときは体を乗り出して母親が話せないようにしたり、母親が話すことを聞こえないふりして F の話を聞いたりした。その分、F の活動が終わった後は、保護者と弟の話を含めた家庭の話の聞いたり、メールを増やして対応した。そのため、母親は、F との活動中に母親の話を聞かないようにしているとは感じていない。

【ケース 8】

対象者：男、17歳 J

ケース内容の概略：小学校時より不登校だった J は、中学卒業後も昼夜逆転の生活を送り、家族以外とのかかわりを持たないでひきこもっていた。何度か会うことが出来たが現在はまた閉じこもりの状態。

保護者もリストラに合い、生活は苦しいため、通信制の高校に通ってほしいという希望がある。

親の状況の概略：リストラを境に共働きになる。長期間のひきこもりのために J に対しての自信を失っているようで高校に行ってほしいなどは言えず、直接の働きかけはない。父親は仕事を頑張っているようで J とのかかわりは少なく母親が中心にかかわっている。J の祖母と同居のため、母親は、J の祖母にもとても気を使っているようで、仕事で精いっぱいな様子。

ピアサポーターによる親にたいする関わりの概略：J の祖母とのコミュニケーションを出るだけ多く心がける。それは、J の家庭において J の祖母がとても重要に感じているからである。母親も J の祖母の言動をととても気にしているので、J の祖母と母親と一緒に話せるときは母親の気持ちを伝えたり、フォローするようにしている。9月に「もう J は訪問してもらっても無理だし、申し訳ないから訪問をやめてもかまわない」と言われたが、J の祖母と母親の3人で話し、情報だけでも伝えさせてほしいと伝え継続することになった。

文部科学省

2010年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究
不登校・ひきこもりの子ども・若者へのピアサポーターによる
「アウトリーチ型」支援の有効性と家庭支援のあり方に関する調査研究
調査研究報告書 I

発 行 : 2011 年 3 月

発 行 者 : 特定非営利活動法人ピアサポートネットしぶや
調査研究委員会